

常なる磐

つねなる いわ seasonⅢ

令和 5年 2月 24日(金)

その1 通算 308号

◇ 常なる磐Ⅲ・57号「小沢昭一的ころ」の 続き

11/2 発：57号 「小沢昭一的ころ」 を振り返る。

主人公の「宮坂さん」が運転する自家用車の助手席には「宮坂さんの奥さん」。穏やかに運転していた宮坂さんだったが、ある拍子に機嫌を損ねて怒りはじめる。

宮坂さんの様子の変化を奥さんが察し、「どうしたの?」と問いかける。宮坂さんは、堰を切ったように荒れ口調で話し始めた。

黙って話を聞く奥さん。宮坂さんの話が終わると、一呼吸おいて語りかける奥さん。

一人二役だが、小沢氏の演じた奥さんの話がよかった。【腑に落ちる】とは、まさにこのこと。

対向車とのすれ違いがようやくできるような細い道を運転している宮坂さん。すると、向こうから対向車がやってくる。このままだと、車のすり抜けも困難だ。そこで、気を利かせて車を路肩に車を寄せ、対向車を優先させる宮坂さん。

すると、宮坂さんが気分を害して怒り始める。怒りの矛先は対向車の運転手だ。

こちらは、対向車の運転手を気遣い、車の通り抜けがしやすいように路肩に車を止めてスペースを空けてあげたのに、車がすれ違う際、対応者の運転手は知らんぷりして通り抜けた。

この運転手の対応に宮坂さんは腹を立てたのだ。「よくある話」である。

一呼吸を置いて話しはじめた「奥さんの切り返し」が お見事。

奥：あなた(宮坂さん)が車を路肩に寄せたのは、あなたが「よかれ」と思ってしたことでしょう。でも、同時にあなたは、車がすれ違う際、相手の運転手が、車を脇に寄せたお礼を、当然してくれるものだと思っていた。会釈するとか、軽く手を挙げて合図を送るとか。けれども、それがなかった。

そのことに腹を立てているわけでしょう。→→→ 宮：そうだよ。

奥：でも、相手はどうだったのかな。車の運転が大の苦手だったのかもしれない。止まってくれたお礼をしなきゃいけないことは分かっているんだけど、運転することにいっぱいいっぱい、それすらできなかったかもしれないじゃない。→→→ 宮：そんな気がしてきた。

奥：もうひとつ。大事なのは、「考え方」だと思うの。→→→ 宮：考え方ねえ…。

奥：あなたは、車を路肩に寄せた時、「やってあげたんだから、お礼がある」と思い込んでいたじゃない。ここよ、問題は。

あなたが相手を思い遣って取った行動だから、それだけでいいじゃない。

挨拶とか会釈とか、「相手から お返しがある」と思うから腹が立つのよ。

宮：今回ばかりは一本取られたわい。

親切も、挨拶も同じ。自ら主体的に行うことに意味があるという教訓である。

車を運転していると、こんな場面にもよく出会う。

急いでいるときに限って「交差点の直前で信号が赤色」になったり、
「踏切を渡る直前で遮断機が降りて」きたり、
「右折できる状態で前方車が停止のまま」だったり。

気持ちの沸点は急上昇↑↑↑
以前は、まさしく自分も「そう」だった。

宮坂さんの奥さんの話みたく「腑に落ちた」友人が語った話を紹介したい。

(前略) 赤信号ねえ。そういうときは、気持ちを切り替えることが大事だな。
できれば都合よく、自分が納得できるように切り替えられれば最高だ。

赤信号が絡むことは日常生活では本当に多いね。
交差点のたびに赤信号に引っ掛かるなんてことも、よくある話でしょ。

ここで、赤信号になったことを「運が悪いな」とか、「ついてないな」とか、
「今日は、よくない日だな」と考えると、自分の気持ちが下がってしまう。

だから、その後の何でもないちょっとしたことも、「悪い運」で片づけてしまいがちになるよね。

「自分の運」を、「悪い」と自分で決めつけることで、その後の流れを悪くしてしまうという悪循環。「運が悪い」と決めたのは、自分なのにね。

そして、「赤信号で止まる」ことが、本当に運が悪いのかということ。

急いでいる時に赤信号で止まると、自分はいつもこう考えるようにしている。

『信号で止まってよかったな。』『信号が赤でよかったな。』

もし、信号が赤に変わらずにそのまま走っていたら、その後のどこかの道で、急に出てきた対向車とぶつかって、事故を起こしていたに違いない。とね。

命さえ危うかった。赤で止まって本当によかった。自分は運がいい。…どう？

約 10 年前、〇〇〇先生(岡崎の常磐東より北にある学校の校長先生)から聞いた話。